

「抱き合え、幾千万の人々よ」 200年の時を越えて 今、よみがえるベートーヴェンの願い

合唱指揮者 山下裕司

私たちは普通、ベートーヴェンの第九交響曲、いわゆる「合唱付き」と聞くと、その第1主題のメロディが浮かぶ事が多いのではないのでしょうか。昔々に小学生だった方は「晴れたる青空 漂う雲よ」という歌詞がすぐに出てきますよね。誰もが口ずさめる、歌いやすい簡単なメロディです。この箇所「第九」に書かれているドイツ語の詩は、「歓喜よ、神々の火花（輝き）よ、楽園の乙女よ…」という意味になります。ギリシャ・ローマ神話にキリスト教的思考が少し入り混じったような、まあちょっと上から目線「歓喜」のようにも思えます。交響曲「第九」では、第1主題がその「歓喜」の爆発とも言える大合唱で前半のクライマックスに達し、それに引き続き第2主題が歌われます。

男性の斉唱（ユニゾン）で始まる第2主題は、簡単な第1主題とは打って変わって、音を取りにくく、覚えにくく、要するに歌いにくい旋律です。第1主題は音階（音の階段）が1段ずつ上がったたり下がったりのバリアフリー設計でしたが、この第2主題は体操の段違い平行棒のような段差が連続して出てきます。転倒注意です。詩の内容は「抱き合え、幾千万の人々よ」と、平和主義そのもの。そしてその「平和」が如何に難しいかと言うことを音楽で表しているのでしょうか。ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエル、抱き合うのはなかなかですよね。

主題1と2を提示したベートーヴェンは、その後、この2つの相反する主題を並行して歌わせるという荒業を用意します。俗にダブルフーガと言います。「第九」合唱のキモですね。作曲家ベートーヴェンの真骨頂です。で、ここで話は急に変わりますが、ベートーヴェンと同時代を生きた哲学者にヘーゲルがいます。この人は弁証法という思考を提唱しました。興味がある方は調べてみて下さい。私はこのダブルフーガがベートーヴェン風アウフ・ヘーベンだと想像するのですが、まあこの話の続きは長くなるので練習の時間でしましょうか。

今年は「第九」初演からちょうど200年という記念すべき年になります。さてこの200年間、何が有ったでしょう。古くはウィーン会議以後の絶対主義 VS 人権主義、そして二つの世界大戦とそれに続く東西冷戦、今を見れば全体主義と民主主義の陣取り合戦。ベートーヴェンが願った「平和」が、一時たりとも実現されたことが有ったのでしょうか。「平和」を口にするのは簡単な事です。でも誰も聞いてくれません。今年「第九を歌う」ことで、もう一步前へ進んでみませんか。

京田辺「第九」2024

200年のときを越えて
ベートーヴェンの願いが今よみがえる

市民と学生が作り上げてきた京田辺「第九」

京田辺「第九」2024 実行委員長 山際雅詩

京田辺市においては、ちょうど10年前の2012(平成24)年に、京田辺市民文化祭の特別企画として、関係各位の多大なるご協力を得て、初めて「京田辺「第九」コンサート」を開催させていただき、大成功を収めました。これ以来、2年おきに2014年、2016年、2018年と回を重ね、「京田辺「第九」」を育て、深化させることで、京田辺市における文化活動の活性化に寄与し、大学との地学連携を深めてきたところです。

「京田辺「第九」」は、大学のまちである京田辺市ならではの、市民と学生による「第九」なのです。オーケストラは同志社女子大学の学生さんが中心となり編成し、合唱団は市民から募集し、運営は京田辺音楽連盟が担当、演奏会は同志社女子大学の新島記念講堂で開催するという形が「京田辺「第九」」を「京田辺「第九」」たらしめています。

そのような意味で、繰り返しになりますが、「京田辺「第九」」は市民どうしの絆を深め、一体感を醸成するのみならず、市民と大学との交流・連携を深め、文化の息づくまちづくりの一翼を担うという重要な意義を持っているのです。

しかし、この「京田辺「第九」」もコロナ禍にあって、残念ながら中止を余儀なくされましたが、ここに、「京田辺「第九」2024」として京田辺音楽連盟創立30周年でもある2024年、10月27日に復活します。

是非一人でも多くの市民の方にご参加いただいで、ともに素晴らしい「京田辺「第九」」を作り上げましょう！